



Title	文筆家による組織的な戦争プロパガンダ : 第一次世界大戦における 「ドイツ文筆家保護連盟」 の活動から
Author(s)	真貝, 恒平; SHINKAI, Kohei
Citation	独語独文学研究年報, 32, 16-35
Issue Date	2005-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/26144
Type	departmental bulletin paper
File Information	32_P16-35.pdf



文筆家による組織的な戦争プロパガンダ —— 第一次世界大戦における「ドイツ文筆家保護連盟」の活動から ——

真貝 恒平

1. はじめに

本稿では、第一次世界大戦期における「ドイツ文筆家保護連盟」(Schutzverband Deutscher Schriftsteller: 略称 SDS。以降は„SDS”と表記)の活動状況について考察する。この連盟 SDS は、1909年に当時ベルリンで活動していた作家、ジャーナリストを含めた「文筆業」(Schriftstellertum)に携わる人々、とりわけ文筆業を本業とする「職業文筆家」(Berufsschriftsteller)を構成員とする組織であり、文筆家の経済的苦境を打破することを目標に掲げていた。また1920年からはその組織名にさらに「ドイツ文筆家労働組合」(Gewerkschaft deutscher Schriftsteller)という呼称が加わり、当時、組織活動において主流であった「労働組合」へと組織転換を果たしている。1933年のナチスによる権力掌握以降は、その傘下に創設された組織「ドイツ文筆家帝国連盟」(Der Reichsverband Deutscher Schriftsteller: 略称 RDS)に吸収合併され、職業団体としての自立性を失ってその活動に幕を閉じる。

こうした変遷の過程をたどった SDS は、第一次世界大戦中に『ドイツ兵士の本』(„Das deutsche Soldatenbuch“)と『SDS の戦争ファイル』(„Kriegsmappe des SDS“)という2冊の小冊子を刊行した。1914年、つまり第一次世界大戦の勃発した年に戦争を支援すべく刊行された『ドイツ兵士の本』は、その題名からも分かるように、まさに兵士のための「読み物」として刊行された。一方、それから2年後に刊行された『SDS の戦争ファイル』では、『ドイツ兵士の本』で謳われた戦争賛美が影を潜めた。収録された作品は執筆者各人の戦争に対する個人的な態度表明であり、そこには『ドイツ兵士の本』でみられた「戦争プロパガンダ」としての統一性はほとんど見られない。しかし、この2冊の小冊子には別の面で共通点があった。これらの刊行物は「戦争を口実として文筆業の存在意義・重要性を世に宣伝しよう」とする SDS の「プロパガンダ活動」の一環だったのである。つまりこれらの刊行物は、第一次世界大戦中に文筆家たちによって広く行われた戦争プロパガンダの一端を担うものであったと同時に、その背後には、SDS が〈社会へ向けて文筆業の存在価値をアピールする〉という思惑が隠されていたのである。換言すると、『ドイツ兵士の本』と『SDS の戦争ファイル』は、SDS が掲げた目標でもある、文筆業で生活の経済的基盤を確保する、あるいは、少しでも自分たちの収入を上げる、といった目的のために刊行されたと言うことも可能なのである。本稿では、これらの小冊子をもとに、当時の作家やジャーナリストたちがその時代の趨勢に便乗し、あるいは翻弄されていた様相について論じる。

2. 第一次世界大戦勃発の歴史的背景

1910年頃、ドイツ帝国の政治と経済は危機的状況にあった。国内においては、金融資本の独占化に伴う富の偏在(ベルリンの九つの銀行が全ドイツの銀行資本の8割以上を管理していた)

が経済的不平等と階級間格差をもたらしていた。1911年には3194件のストライキおよびロックアウトが行われ、それらには約37万人の労働者が参加した¹。こうした国内の矛盾から国民の目をそらすために冒険的な対外政策を推し進めることは、権力者の常套手段である。そこで皇帝ヴィルヘルム2世もまた積極的な帝国主義政策を推進し、イギリスやフランスに対して植民地の再分割要求を行ったのである。もちろんイギリスを追い抜いてヨーロッパ最強の工業国へと駆け上がっていたドイツにとって、海外市場の確保は経済的な発展のためにも必要であった。こうして北アフリカでは1905年の「タンジール事件」²、1911年の「アガディール事件」³と一触即発の緊張状態が続き、またバルカン半島では汎ゲルマン主義と汎スラブ主義が対立し、軍事的衝突の危険性をますます増長させていったのである。

このような状況の中で、ドイツ国内においては、国粹主義者のみならず様々な階層の人々の間で好戦的気運が盛り上がってくる。1871年のドイツ統一を可能にした最大の要因がフランスに対する軍事的勝利であったことは、いまだ人々の間に輝かしい記憶として残っており、それから40年を隔てた1910年前後においても、問題状況を打開するためには戦争が有効な政治手段であると考えられていた。したがって、ドイツ民族の威信を示し、ヨーロッパのみならず全世界においてドイツ帝国の地歩を固めるために武力に訴える、という考え方は、当時それほど危険で不自然なものであるとは思われていなかったのである。

1914年6月28日、オーストリアの帝位継承者フランツ・フェルディナント(Franz Ferdinand: 1863-1914)がオーストリアに併合されたボスニアの首都サラエヴォを訪れ、市内巡幸中にセルビア人青年によって狙撃され落命する、という事件が起こった。事件の背後には、セルビアの再生と拡大を目指す秘密結社「黒手組」(Schwarze Hand セルビア語: Црна рука)⁴、セルビア参謀本部、さらにはロシア大使館付き武官などの反オーストリア勢力の動きがあった⁵。そしてこの事件によって引き起こされた「七月危機」が大戦争を誘発していく。

事件後、ヴィルヘルム2世は7月5日ベルリンに派遣されてきたオーストリア使節団長ホヨ

¹ 矢野久/アンゼラム・ファウスト [編]『ドイツ社会史』66頁。

² 北アフリカ、モロッコでの権益をめぐるドイツとフランスの争い。19世紀後半、モロッコ帝国(アラウィ朝)は近代改革を実施して富国強兵をはかっていた。これに対しアルジェリアを本拠とするフランスは大陸横断政策を掲げて、反乱部族の国境侵犯を口実にモロッコへ徐々に進入した。この状況の中でモロッコに反乱が起こり、フランスとスペインが軍事介入してスルタンを援助した。1904年、英仏協商にもとづいてフランスはスペインとモロッコの勢力範囲を決めた。1905年、ドイツの皇帝ヴィルヘルム2世がタンジールを訪問し、フランスのモロッコ進出に反対し、モロッコの領土保全、門戸開放を強調して列国会議の開催を表明した。1906年、事件解決のためスペインのアルヘシラスで国際会議が開かれ、フランスはイギリスに支援されてモロッコでの優先権を認められた。

³ 北アフリカ、モロッコでの権益をめぐるドイツとフランスの争い。ドイツ軍艦がアガディールに入港したことから緊張が高まった。タンジール事件についてフランス優位のうちに解決された。この結果、ドイツは国際的に孤立し、状況打開のためにオーストリア・ハンガリー帝国との関係強化をいっそう求めるようになった。

⁴ 1908年、青年トルコ党がトルコで革命をおこした混乱期に乗じ、オーストリアはボスニア・ヘルツェゴビナ両州を占領して、その領土の合併を宣言した。この合併を機に、セルビア人の反オーストリア運動は高まりをみせ、次第に過激な非合法的手段がとられるようになってきた。この状況の中で1911年に結成されたのが民族主義団体「黒手組」である。この団体は秘密テロ組織で、セルビア人居住地域、特にオーストリア・ハンガリー帝国領であったボスニア・ヘルツェゴビナの併合を目標としていた。フェルディナント夫妻を射殺した青年ガブリロ・プリンチーブ(Gavrilo Princip: 1894-1918)もこの団体に所属していた。

⁵ 成瀬治 山田欣吾 木村靖二 [編]『ドイツ史3-1890年～現在』山川出版社 1997年 58頁。

スに「同盟の信義」を守ることを約束し、オーストリアの対セルビア政策を無条件で支援するという立場を示した。国際的孤立を深めていたドイツとしては、オーストリアとの同盟の絆を固くしなければならなかったのである⁶。7月23日、ドイツの後ろ盾を得たオーストリア政府はセルビアに最後通牒を發した。そして28日、オーストリアは曖昧な返答をしたセルビアに対して、戦端を開き、これに対してロシアもまた総動員令を發したのである。ドイツは8月1日、ロシアに対して、3日にはフランスに対して宣戦布告を發し、ベルギーとの中立を侵してフランスに向けて進撃した。これに対してイギリスは4日、ドイツに宣戦布告し、こうして事態は全面的な大戦争へと突入していったのである。

3. 「城内平和」と「1914年の理念」

ドイツ国政の一翼を担う帝国議会においてヴィルヘルム帝政への不満を受けとめていたのは、当時のドイツで唯一の社会主義政党である社会民主党（Sozialdemokratische Partei Deutschlands: 略称 SPD）であった。同党は現状打破への国民の期待を担って1912年の帝国議会選挙で投票数の35%にあたる400万票を獲得し、第一党へと躍進した。そして1914年6月28日のオーストリア皇太子暗殺事件により戦争勃発の危険が高まり始めると、7月26日には、オーストリア政府の対セルビア強硬策に反対して、社会民主党主催の大規模な反戦デモが行われた。社会民主党はすでに1912年のバーゼル反戦決議を承認しており、原則的に戦争に反対を言明していたのである。しかし、社会民主党指導部と帝国政府の間では、党が穏和な行動をするならば政府も強権的態度はとらない、という理解がなされており、さらに大衆の間でも上記のような反戦デモとは反対の動きが一気に沸き起こった。開戦直前の7月末頃から、ベルリンでは学生や愛国団体を中心に戦争支持のデモが行われ始め、各新聞の論調もそれらに呼応した。8月1日の動員令布告後には、王宮前広場に10万人以上の群集が集まり、愛国歌「ラインの守り」（Die Wacht am Rhein）やその他の様々なドイツの歌を合唱し、皇帝に歓呼を送った⁷。このときヴィルヘルム2世が行った演説「国民の中にもはや党派はない、ただドイツ人だけがいる」（Ich kenne keine Parteien mehr, ich kenne nur Deutsche）との言葉があった。これがドイツ国民の団結を表現するスローガンとなったのである。多くの政治家、知識人、国粹主義者が、開戦時のこうした「団結」をドイツ国家の理想的状態と位置付け、これを「1914年の理念」（Die Ideen von 1914）⁸と称揚し、西欧諸国の近代個人主義思想に対置しようとした。そしてこの「理念」は、その後のナショナリズムの運動にも引き継がれていく。

世界大戦勃発後の8月4日、帝国議会では社会民主党議員団も賛成に回り、戦時公債法案が

⁶ 成瀬治 山田欣吾 木村靖二[編]『ドイツ史3-1890年～現在』山川出版社1997年58頁。

⁷ 同上。

⁸ 第一次世界大戦勃発とともにドイツ知識人の世界で喧伝されたスローガン。この表現は、元々はミュンヘンの社会学者ヨハン・ブレンゲ(Johann Plenge: 1874-1963)に由来するが、1916年に哲学者エルンスト・トレルチュ(Ernst Troeltsch: 1865-1923)が同じタイトルの論文を發表するなど、さまざまな政治的背景をもつ広汎な知識人の中で好んで用いられた。多くのドイツの知識人は、第一次世界大戦を西欧的啓蒙主義に対する「ドイツ精神」の戦いとして捉え、前者を「1789年の理念」と呼び、後者を「1914年の理念」と名づけた。

可決された。これとともに各政党は、世界大戦に向けて諸力を集中するために、政党同士の対立状況を解消し、また皇帝に反対する立場を放棄した。ここに「城内平和」(Burgfriede)⁹といわれる事態が現出したのである。この城内平和によって、ヴィルヘルム2世統治下の内閣は社会民主党に対して活動上の諸制約の緩和(駅の売店や軍隊内での出版物の販売など)を認めつつ、他方では社会民主党を通じて、政府に対する労働者大衆の支持を取りつけることができたのである。そして、第一次世界大戦勃発によって引き起こされた社会民主党の方針転換と「1914年の理念」や「城内平和」といったスローガンのもとでの国民団結といった異例の事態は、当時の文筆業界とSDSの内部にまで及んでいたのである。

4. 文学による戦争賛美 —— 連盟代表ウルリッヒ・ラウシャーの政治的転向 ——

すでに見てきたように、第一次世界大戦の勃発は人々の間に一種の高揚状態を生み出した。この点については文筆業界も例外ではなかった。ドイツ国民全体を襲ったこの高揚感、文筆業界の社会的役割にも大きな変革をもたらし、組織の強化を図りつつあったSDSもまた、こうした時代の渦の中に巻き込まれていったのである。

当時のSDS代表ウルリッヒ・ラウシャー(Ulrich Rauscher: 1884-1930)が表明した政治的態度は、文筆業界の政治的な方針転換を象徴的に示している。彼は才気煥発なジャーナリストとして定評があり、特に1913年初頭にSDS代表の座に就いてからは、文筆業に関わるさまざまな利害問題に積極的に取り組み、ヴァイマル共和国期には外交官としても活躍している。そのラウシャーが、1914年末に2冊の著書『戦争と文学』(„Der Krieg und Literatur“)と『祖国にいる者の戦争義務』(„Die Kriegspflicht der Daheimgebliebenen“)を発表した。それは、戦時中の文筆家の意義と使命を代弁し、戦争へ向けて一致団結しようという理念を示すものであった¹⁰。「血によって書き記すのだ、そして血こそが精神であることを体験できるだろう」(Schreibe mit Blut: und du wirst erfahren, daß Blut Geist ist)¹¹という激烈な一文で始まるラウシャーの『戦争と文学』の内容は、積極的な戦争の支援と賛美であった。彼は、文学の力を戦争へと「総動員」させることを掲げて、次のように述べている：

今日のこのような暴力にまみれた世界の中で、ドイツの言葉をもつ者は、我々民族の大きな闘争の指揮者である。言葉が自らの仕事道具である詩人や文筆家は、民衆の思いを鼓舞するためにドイツの言葉と呼び覚ますのだ！ フィヒテが我々民族共同体の証と見なした、国家の統一的財産である「言葉」を今こそ呼び覚ますのだ！ 我々文筆家は、時代が与えた苦しみや偉大さを後世に伝える役割を担っている。だから今こそ、我々は詩人の言葉を通じて、この苦しみを背負い、これを力に変えて民族の喜びへ導く神の言葉を発するのだ！¹²

⁹ 語源は、城壁に囲まれたある中世都市において、内部の私闘を禁止することによって、長きにわたり平和が保たれたことから来ている。その後、国家の非常事態を乗り切るために、党派、階級などの国内の争いを一時中断する際の政治的スローガンとして用いられるようになった。

¹⁰ Fischer, Ernst: Schutzverband deutscher Schriftsteller. Frankfurt am Main 1980. S. 152.

¹¹ Rauscher, Ulrich: Der Krieg und Literatur. München und Berlin 1914. S. 5.

¹² Ebd.

国家と国民による挙国一致体制を形成するために、ラウシャーは詩人、小説家、ジャーナリストにその中心的役割を与えたのである。このような社会的に高次の文筆家の任務の正当性の根拠を裏付けるものとして掲げられ、崇拜されるべき偶像の役割を果たしたのが、ゲーテやフィヒテといった過去の文学、哲学の巨匠たちであった。ラウシャーはさらに次のように続けている：

文学は民族のために理想 (Ideal) を形作る。文学の中に、民族固有の理想像 (Idealbild) は燃え尽きることなく、不滅の灯火として宿っている。エッカーマン、ゲーテ、メーリケ、ブレンターノ、ケラー、その他の多くの詩人たちのところで！ ドイツの正義の証、ドイツの勝利への喚起がいたるところに溢れているのだ。これらの詩人たちの本を手にとりて読むのだ！ この時代に我々国民に課せられた義務は、ドイツ性 (Deutschtum) の偉大さを知ることである。ドイツ人であることは、知性、高い理想への憧憬なしには不可能である。¹³

ラウシャーは、文学の巨匠たちを「使者」(Herold)、「司令官」(Herrufer)、「真の知的指導者」(wahre geistige Führer)、「民族の偉大な人物」(Großen des Volkes)¹⁴といった言葉で、社会的に高い使命を持った人物として評価したのであった。このような現実離れした理想主義が生まれた背景には、次のような戦争勃発による価値の転換があった。

1871年以降の泡沫会社設立時代における産業化によって、ドイツは世界の大国と肩を並べる工業国への階段を駆け上がった。第一次世界大戦の勃発は、こうした急激な産業化に対する反動として、ドイツにこれまでの物質主義的思想を浄化する役割を与える機会となった。そして「文化」(Kultur)、「知的・理想的なもの」(Geistig-Ideale)へと方向づけられたドイツの生活様式と、「文明」(Zivilisation)、「西洋的・資本主義的」(westlich-kapitalistisch)生活様式といった対立構造を引き起こしたのであった¹⁵。

このような文化の救済、知的価値に基づいた「理想のための戦い」へと方向づけられた第一次世界大戦時の高揚感によって文筆家に課せられた社会的使命とは、個々人の利益追求ではなく、崇高な戦争の指揮官となることであった。つまり、文筆家には一貫して「文学の機能を生かした戦争賛美」が求められたのである¹⁶。

上記のような内容の衝撃的な著作を刊行して政治的転向を果たしたラウシャーは、さらにこれまで SDS が連盟綱領小冊子『商品としての文学』 („Literatur als Ware“) ¹⁷で掲げてきた文学の「商品性」に対しても、一転して苦言を呈している：

¹³ Rauscher, Ulrich: Der Krieg und Literatur. S. 11.

¹⁴ Ebd.: S. 15.

¹⁵ Vgl. Koester, Eckart: Literatur und Weltkriegsideologie. Positionen und Begründungszusammenhänge des publizistischen Engagements deutscher Schriftsteller im Ersten Weltkrieg. Kronberg 1977. S. 220.

¹⁶ Fischer, Ernst: Schutzverband deutscher Schriftsteller. S. 153.

¹⁷ 1911年連盟綱領パンフレットとして連盟会員ヴァルター・フレート(Walter Fred: 1879-没年不詳)によって刊行された。詳細は 真貝恒平:『文学の商業性 —— 1910年頃における文学作品の価値をめぐって ——』独語独文学研究年報第31号 99~114頁。

我々がここで話題にする「文学」は、世界の運命を一身に背負う重要な創造物であるにもかかわらず、昨今ではその品位を失ってしまっている。なぜなら、我々の時代には文学の品位を落とすような試みが横行しているからである。その試みとは、四方八方に放散する「血」(=文学)を可能な限り鍋や陶器に集め、それを商品として売り出し、がつがつと貪り食うことである。¹⁸

ラウシャーの考えによれば、こうした状況は、第一次世界大戦の勃発によって、文学は、もはやその売り上げによって職業文筆家が生計を立てるための生産物、商品ではなくなるべきであった。ラウシャーが主張するように、文学は「ドイツ文芸の聖域」(Allerheiligste deutscher Dichtkunst)、「不滅の旋律をもち時代を超越する永遠に美しい形象」(zeitlose, ewig schöne Gebilde mit seinem unzerstörbaren Rhythmus)であり、「偉大な人物たちが民族へ宛てた時代を超越した書状」(zeitlose Sendschreiben der Großen an ihr Volk)でなければならなかった¹⁹。つまり、これまで SDS が掲げてきた合理的・物質主義的綱領とは正反対の考え方こそが、この時代の要求に相応するものであったのである²⁰。

SDS のような文筆家の経済問題を扱う代表機関が、戦争勃発によってその本来の機能を停止し、一転して戦争プロパガンダ機関となったことは、当時のドイツにおいて稀なことではなかった。つまり、社会におけるさまざまな組織が、SDS と同様に戦争という非合理的な状況・事態への介入、さらには、全ドイツ国民の意思統一へと導いたのであった²¹。SDS 代表ラウシャーの理想主義・国家主義的態度への方向転換は、第一次世界大戦によるドイツ全体の精神的高揚、さらには社会民主党の戦争賛成、労働組合活動の休止といった事態と同じものであった。

ラウシャーによって導き出された戦争支援、戦争賛美は、SDS の会員である文筆家たちにも大きな影響を及ぼした。SDS はやがて、これまでの文筆業の利益代表という立場を放棄し、ドイツ民族のアイデンティティーを形成する機関、一丸となって戦争へと参加する機関へと「転換」を果たすのである。この新しい立場を前面に押し出したのが、1914 年末に刊行された『ドイツ兵士の本』であった。

5. 『ドイツ兵士の本』—— SDS による戦争プロパガンダ活動 ——

1914 年末、SDS 執行部メンバーであるローベルト・ブロイアー (Robert Breuer: 1878-1943)²²、ハンス・ランツベルク (Hans Landsberg: 1875-1920)²³、そしてウルリッヒ・ラウシャーが中心となって「ドイツ文筆家保護連盟」編集という形をとって『ドイツ兵士の本』(„Das deutsche Soldatenbuch“)が刊行された。この小冊子は、戦地に従軍する前線兵士のために起草された「読み物」であり、1 マルクで軍事郵便物として発送することができた。また、店頭で

¹⁸ Rauscher, Ulrich: Der Krieg und Literatur. S. 6.

¹⁹ Ebd.

²⁰ Fischer, Ernst: Schutzverband deutscher Schriftsteller. S. 154.

²¹ Rosenberg, Arthur: Entstehung und Geschichte der Weimarer Republik. Frankfurt am Main 1955, S. 73.

²² ジャーナリスト、政治家。設立から第一次世界大戦後まで、SDS の業務執行者として連盟活動の中心人物として活躍した。

²³ ジャーナリスト。SDS 設立の原動力となった人物であり、初期連盟活動の中心人物であった。

販売されたという記録も残っている。『ドイツ兵士の本』の販売で得られた全収入は、SDS の戦争支援金へとまわされた。

170 ページにも達するこの小冊子には、さまざまなジャンルに及ぶ 24 の寄稿が収録された。構成は、詩、短編小説、逸話といった文学ジャンルの他に、軍事報告、旅行記が含まれ、巻末には「ドイツの言葉」 („Deutsche Worte“) という章が設けられた。そこにはフリードリッヒ大王 (Friedrich der Große: 1712-1786)、フィヒテ (Johann Gottlieb Fichte: 1762-1814)、ヨーハン・アルント (Johann Arndt: 1555-1621)、ビスマルク (Otto von Bismark: 1815-1898) の言葉が格言集として盛り込まれていた。



【図版 1】『ドイツ兵士の本』表紙

『ドイツ兵士の本』冒頭部において、当時のドイツ陸軍大将ヘルムート・フォン・モルトケ (Helmuth von Moltke: 1848-1916)²⁴のドイツ兵士へ向けた檄文と、二人の国会議員の演説原稿、すなわち自由党国会議員ゴットフリート・トラウブ (Gottfried Traub: 1869-1956)²⁵による『戦争と精神』 („Krieg und Geist“) 、社会民主党国会議員ヴォルフガング・ハイネ (Wolfgang Heine: 1861-1944)²⁶による『戦争における社会主義的理想』 („Sozialistische Ideale im Kriege“) の共演によって華々しく始まる。このような『ドイツ兵士の本』冒頭部の、社会民主主義の政治家ハイネ、保守主義の軍人モルトケ、政治家トラウブの共演は、ドイツ国民の統一をはかる試みであり、党派を超えたまさに「城内平和」の理想を掲げたものであった。つまり、本来異なる立場であるはずの三者が、同じ戦争賛美の姿勢を明らかにしていることは、戦争の精神化、非合理的な物事に正当性を与えるものであった²⁷。モルトケは、次のような言葉をドイツ兵士に送っている：

私はドイツ兵士に、この「神聖なこと」 (heilige Sache)、つまり、平和を愛するドイツに突きつけら

²⁴ 軍人。1870～71年の普仏戦争に将校として出兵。若くして軍参謀本部のメンバーであった。1914年の第一次世界大戦勃発当時は、西部戦線の指揮を執ったが、すぐに第一線を退き、同年末にはベルリンの軍参謀本部長に就任した。

²⁵ 政治家、牧師。1887～91年までテュービンゲン大学で神学を学び、1892年から父のもとで牧師候補として働く。その後、ヨーロッパ各国を旅行し、1901～12年までドルトムントで牧師を務めながら、1912年にチューリッヒ大学で神学の名誉博士号を取得。その後、プロイセン州の「ドイツ進歩党」の議員として政治の世界に足を踏み入れる。第一次世界大戦勃発を機に「ドイツ祖国党」へ移り、以後、キリスト教保守主義の立場から政治家として活動した。

²⁶ 法学者、国会議員。ギムナジウム教師の家庭に生まれ、1879年までブレスラウ、ベルリンの大学で法学と自然科学を学ぶ。1898年 SPD 入党。1919～20年にはプロイセンの内務大臣に就任し、さらに「ヴァイマル国家会議」 (Weimarer Nationalversammlung) のメンバーであった。

²⁷ Vgl. Fischer, Ernst: Schutzverband deutscher Schriftsteller. S. 156.

れた「聖戦」(heiliger Krieg)において、物質的財産よりも価値の高いものが危険にさらされている、という事態を十分に理解してほしいと思う。すなわち、この戦争で指導的な「ドイツ精神」というものを獲得するのだ！もし、ドイツの民族精神が内に理想的目的を復活させるのであれば、これは永遠の力を秘めている。²⁸

Inhalt	
Einführung. Von Generaloberst von Wolff	Seite 13
Krieg und Geist. Von D. Gottfried Kossib, R. d. M.	15
Sozialistische Thesen im Kriege. Von Wolfgang Steier, R. d. M.	21
Serbien. Gedicht von Theodor Fontane	29
Umjüngel. Novelle von Detlev von Liliencron	34
Der Iann Deutsch. — Der löbliche Steiermährer. Anecdotes von Johann Peter Hebel	48
Unter Krieg gegen Frankreich. Von Oberstleutn. Frobenius	51
Der Tambour. Gedicht von Eduard Mörike	56
Den Golgen! sagt der Eisele. Von Hermann Kurz	57
Alle Landbesitzer. Gedicht von Börries, Freiherr von Münchhausen	69
Schlachtbilder aus Belgien und Frankreich. Von Dr. Theodor Heuß, mit zwölf Bildern von Walter Rufsch	71
Anecdotes. Von Heinrich von Kleist	87
London. Von Dr. Carl Peters, mit fünf Bildern von Keni „Gorben“ und „Breslau“ von Kessina. Von Peter Scher, mit Bild von Ernst Ostf	103
Die kaiserliche Marine. Von Vizeadmiral J. D. Kirchhoff	104
Zur Nilotus. Gedicht von Gottfried Keller	112
Ein bayerischer Soldat. Novelle von Ludwig Thoma	113
Witz, die Türkei und der Balkan. Von Graf Ernst zu Reventlow, mit zwei Karten	131
Marzlied. Von Ulrich Haufser	144
Der Knecht. Novelle von Honoré Paquet	145
Tafelbergdorn. Mit Bild.	161
Deutsche Worte	163
Neue Zeit. Gedicht von Ernst von Willdenbruch	167

【図版2】『ドイツ兵士の本』目次

つ寄稿した。さらにデートレフ・フォン・リーリエンクロン (Detlev von Liliencron: 1844-1909)³³、ヘルマン・クルツ (Hermann Kurz: 1813-1873)³⁴、ルートヴィヒ・トーマ (Ludwig

さらにトラウプは、民族全体と個人を結び付けて次のように述べている：

戦わなければ誰も死ぬことはない。しかし、個々が最も高次な理想のために自ら死を選ぶのであれば、ドイツの民族性は呼び覚まされるだろう。²⁹

『ドイツ兵士の本』に収録された24篇のうち、詩は8篇、内訳はベリエス・フォン・ミュンヒハウゼン男爵 (Börries Freiherr von Münchhausen: 1874-1945)³⁰ が2篇、テオドール・フォンターネ (Theodor Fontane: 1819-1898)、エードルアルト・メーリケ (Eduard Mörike: 1804-1875)、ゴットフリート・ケラー (Gottfried Keller: 1819-1890)、ウルリッヒ・ラウシャー、ペーター・シェール (Peter Scher: 1884-1953)³¹、そして、エルンスト・フォン・ヴィルデンブルッフ (Ernst von Willdenbruch: 1845-没年不詳)³²がそれぞれ1篇づ

²⁸ Das deutsche Soldatenbuch, herausgegeben vom Schutzverband Deutscher Schriftsteller. (Schriftleitung Robert Breuer, Hans Landsberg, Ulrich Rauscher) Berlin, 1914.

²⁹ Das deutsche Soldatenbuch, S. 17.

³⁰ 詩人、小説家。ロマン主義の影響を受け、歴史的素材を用いて騎士的生活感情を歌った。

³¹ 文筆家、編集者。商人、保険外交員、俳優と職業を転々とした後、1903年にベルリンの雑誌『月曜新聞』(„Zeit am Montag“)の編集に携わる。第一次世界大戦前にはベルリンの文学サークル「ベルリン・ボヘミアン」(Berliner Bohème)に属し、『行動』(„Die Aktion“)、『疾風』(„Der Sturm“)、『ジンプリチシムス』(„Simplicissimus“)、『青年』(„Jugend“)といった当時の代表的文学・政治雑誌に詩、小説を掲載した。

³² ベイルート生まれ。劇作家、法律家、外交官。

³³ 抒情詩人、短編小説家、劇作家。ギムナジウムを中退して実科学校卒業後、ベルリンの士官学校に入学、1863年に士官となる。しかし、1875年には博打による膨大な借金が原因で除隊。以後は抒情詩人として活動。1883年『副官の騎行およびその他の詩』(„Adjutantenritte und andere Gedichte“)や1891年の『霧と太陽』(„Nebel und Sonne“)などを発表した。

³⁴ 文筆家、翻訳家。テュービンゲンで神学を学び、1836年から文筆活動を始める。多くの雑誌の編集、さらに翻訳も手掛けた。1844～47年までカールスルーエで雑誌『教訓と娯楽のためのドイツ家庭雑誌』(„Deutsches Familienbuch zur Belehrung und Unterhaltung“)と、さらに1851年には民主主義的政治雑誌『観察者』(„Beobachter“)の編集長を務めている。郷土愛に根ざした詩、歴史小説を書いた。



【図版3】ヘットナーによる挿絵

41といった芸術家たちであった。

こうした収録作品のいずれもが、自身の戦争体験に基づいたもの、あるいは郷土愛に根ざした

Thoma: 1867-1921)³⁵、アルフォンス・パーケ (Alfons Paquet: 1881-1944)³⁶がそれぞれ一篇ずつ短編小説を寄稿している。この他に、方言文学の先駆者であるヨーハン・ペーター・ヘーベル (Johann Peter Hebel: 1760-1826)、ヘーベルと同時代で、後世に残る戯曲、小説を書いたハインリッヒ・フォン・クライスト (Heinrich von Kleist: 1777-1811) の2篇の逸話が収録された。

詩、短編小説、逸話といった文学ジャンルの他に、ヘルマン・フロベニウス中佐 (Hermann Frobenius: 1841-1916)³⁷、エルンスト・フォン・レーブントロウ男爵 (Ernst von Reventlow: 1869-1943)³⁸の戦況報告が収録された。さらに、『ドイツ兵士の本』にはいくつかの挿絵が盛り込まれている。これらの挿絵を提供した人物は、オットー・ヘットナー (Otto Hettner: 1875-1931)³⁹、パウル・レーニ (Paul Leni: 1885-1925)⁴⁰、エミール・オルリック (Emil Orlik: 1870-1932)

³⁵ ミュンヘンで法学を学び、1894年からダッハウで弁護士として活動する。1897年から再びミュンヘンに移り住みし、文筆業を開始。保守主義的な新聞『アウグスブルク夕刊紙』(„Augusburger Abendzeitung“)に政治記事を掲載する。さらに文芸雑誌『青年』(„Jugend“)、『ジンプリチシムス』(„Simplizissimus“)にも詩や短編小説を掲載する。故郷バイエルンの農民たちを描いた『アンドレーアス・フェスト』(„Andreas Vöst“)や『男やもめ』(„Der Wittiber“)によって彼は、ユーモアに満ちた民話の大家と称された。それと並んで彼は『メダル』(„Medaille“)や『モラル』(„Moral“)といった喜劇を書き、政治的・社会的風刺文学を展開した。第一次世界大戦を機に政治性を強め、1915年には「ドイツ祖国党」(Deutsche Vaterlandspartei)に入党し、政治的行動が目立つようになった。

³⁶ ジャーナリスト、文筆家。ヴィースバーデンで商業学を学んだ後、1901年からベルリンで帳簿係として働きながらジャーナリストとして地方紙に記事を書き始める。1903年からハイデルベルク、ミュンヘン、イェナで国民経済学を学び、1908年に博士号取得。ヨーロッパ、アジア、アメリカを旅し、1916年から『フランクフルト新聞』の通信員としてストックホルムに滞在。さらに1932年には「プロイセン芸術アカデミー」のメンバーになっている。代表作には詩集、小説『予言』(„Die Prophezeiung“: 1923)、エルヴィン・ピスカトラーの絶賛を浴びた戯曲『旗』(„Fahnen“: 1923)がある。

³⁷ 軍人。1861年から職業軍人として働き始める。普仏戦争の際には、ベルリンの将校養成学校で教鞭をとる。1881年から要塞で技術者として働き、1881年からベルリンの要塞術専門学校の校長を務めた。

³⁸ 文筆家、政治家。1888年に帝国海軍に入隊するが、わずか一年で除隊。その後、ジャーナリストとして活動し、ヴィルヘルム朝に対して激しい批判を展開した。第一次世界大戦後はヴァイマル共和国に対する批判記事を書き、国家ボルシェビストとして政治運動に積極的に関与する。1927年に国家社会主義党に入党。

³⁹ 画家、イラストレーター、彫刻家。1904～11年まで軍隊生活を送るが、病気のため除隊。以後、芸術家として活動。

⁴⁰ 舞台芸術家、舞台監督。画家、風刺画家として芸術家としてのキャリアをスタートさせ、1912年からベルリンで舞台芸術家として活動。1926年にはアメリカのハリウッドに渡り、スリラー映画の発展に貢献した。

⁴¹ ブラハ生まれの画家、イラストレーター、工芸家。1896～97年までミュンヘンの雑誌『青年』(„Jugend“)の編集者として挿絵を提供。その後、1904年までブラハで芸術活動を展開、1905年からベルリンの美術学校で教壇に立つ。1911年からアフリカ、インド、日本を旅行し、特に日本の絵画に影響を受けた。

民族性を喚起するものである。ただし、各作者が取り上げている時代は、徒歩傭兵時代からナポレオン戦争、1870～71年の普仏戦争、そして第一次世界大戦に至るまで幅広く様々である。冒頭部を飾ったモルトケに代表される「国家・民族の統一」路線を打ち立てたものから、ミュンヒハウゼンの残虐で血なまぐさい詩『刀の格言』（„Schwertspruch“）、あるいは、メーリケの牧歌的でユーモアに溢れた詩『鼓手』（„Tambour“）にまで至る。

この『ドイツ兵士の本』は、各種の新聞・雑誌の紙面上で好意的な評価をされた。連盟機関紙『文筆家』（„Der Schriftsteller“）は6ページを割いて、「小さな選択」（„Kleine Auswahl“）というコーナーを設け、21名の連盟会員による各新聞、雑誌の書評を掲載している。その中にはヘルマン・キーンツル（Hermann Kienzl: 1865-1928）⁴²、オスカー・シュミッツ（Oskar A. H. Schmitz: 1873-1892）⁴³、テオドーア・ホイス（Theodor Heuss: 1884-1963）⁴⁴、ユリウス・バープ（Julius Bab: 1880-1955）⁴⁵といった当時の連盟執行部のメンバーも含まれていた。連盟会員が連盟の出版物を批評するのであるから、当然、その内容は故意的にならざるを得ない。したがって、これらの批評は、おそらく単なる宣伝活動の一環であったと考えるべきであろう。ヘルマン・キーンツルは『ハンブルク外国雑誌』（„Hamburger Fremdenblatt“）、『ネッカー新聞』（„Neckar-Zeitung“）で「このような手法で集められた作品集の中で、『ドイツ兵士の本』に勝るほど完璧なもの存在しない」⁴⁶、さらに『新バーデン地方新聞』（„Neue Badische Landeszeitung“）では「ドイツのすばらしい財産である戦争本」⁴⁷と称している。テオドーア・ホイスは政治・文芸雑誌『三月』（„März“）で「良質な文学の精神修養の書（Erbauungsbuch）」と述べている⁴⁸。ユリウス・バープは雑誌『社会主義月刊誌』（„Sozialistische Monatshefte“）の中で「文学・芸術的内容と政治・文芸欄的論文の融合」⁴⁹と称し、この本を熱烈に推奨している。オスカー・シュミッツは、新聞『ターク』（„Tag“）の文芸欄で「城内平和がもたらした美しい収穫」⁵⁰と評した。

このように、『ドイツ兵士の本』は「城内平和」に代表される当時のスローガンを体現し、時代の風潮に合致していたということが言える。第一次世界大戦開戦時にヴィルヘルム 2 世が行

⁴² オーストリア出身の文筆家、編集者。グラーツ、インスブルク、ベルリンで哲学を学び、1889年からウィーンで美術批評家、編集者として、1905年にはベルリンへ移り、劇作家、劇批評家として活動した。SDSの活動にも積極的に関わった人物であり、特に初期連盟活動においては執行部の一人で大きな役割を担った。1928年に彼が亡くなった時、SDSは連盟機関紙『文筆家』の冒頭で追悼文を捧げている。

⁴³ 小説家、劇作家。1892年からハイデルベルク、ライプチヒ、ミュンヘンで法律、国民経済学、精神科学を学び、イタリアを放浪した後、ミュンヘンで世紀転換期頃から出現した秘境的詩人集団「ゲオルゲークライス」（George-Kreis）の一員となる。SDS設立から数年、連盟執行部に名を連ねていた。

⁴⁴ 政治家。SDS設立時は副代表を務めた。1884年にハイルボーン近郊ブラッケンハイムに生まれ、1909年SDS設立当初は若干25歳であった。その後、政治家としてのキャリアを積み、第二次世界大戦後1949年に西ドイツの連邦大統領に就任した。

⁴⁵ 劇作家、劇批評家。ベルリンのユダヤ系木材工場主の息子に生まれ、1902～5年までベルリンとチューリッヒで演劇学を学んだ。SDS設立から20年以上会員を続け、当時のベルリン演劇活動の中心人物であった。

⁴⁶ Im „Der Schriftsteller“ 1915. (H. Kienzl/Hamburger Fremdenblatt)

⁴⁷ Ebd. (Neckar-Zeitung)

⁴⁸ Ebd. (Heuss/März)

⁴⁹ Ebd. (J. Bab/Sozialistische Monatshefte)

⁵⁰ Ebd. (O. A. Schmitz/Tag)

った演説の中の「国民の中にもはや党派はない、ただドイツ人だけがいる」という言葉に当時の状況全てが集約されているように、『ドイツ兵士の本』は明らかに政治、党派を超え、国家統一に役立つ書物として刊行されたのであった⁵¹。比較的安価な値段、戦地へ軍事郵便物として簡単に郵送できること、魅力的な挿絵の数々、「ドイツ兵士の本」という分かりやすいタイトルなど、読者が手に取りやすい、購入しやすいものであるように、という配慮は、この小冊子が「軍隊の読み物」(Truppenlesestoff)としてのスタンダード作品になることを意図していたと思わせるものであった。内容も、「戦争支援・戦争賛美」というコンセプトのもと、さまざまなジャンルを取り込み、ユーモアと血生臭さ、牧歌的描写が混在していたのである。政治的観点からみても、トラウプとハイネの前書きが示すように「城内平和思想」(Burgfriede-Gedanke)が高らかに謳い上げられ、まさに時代の雰囲気をつんだ書物であった。

『ドイツ兵士の本』刊行は、SDS に大きな収益をもたらした。実際の売り上げは現在では記録に残ってはいないが、1917年のSDS通常総会でローベルト・プロイアーが「私が編集に携わった『ドイツ兵士の本』は連盟に何千マルクもの収益をもたらした」⁵²と発言している。戦地に赴いている兵士に、ドイツの文筆家とドイツ国民が共闘していると示すこと、またこれを通じて文学を「創造」する人々の社会的価値を誇示することが、『ドイツ兵士の本』刊行の目的であった。過去の文学の巨匠に加えて、存命中である政治家、詩人、小説家の言葉や作品を収録することにより、SDSは文筆家を政治的指導者と同列に置こうとした。つまり、政治的な役割をも担いうる知的指導者の地位へと高めようとしたのである。したがって、『ドイツ兵士の本』の刊行は、戦争の支援と賛美をコンセプトとした大々的な戦争プロパガンダであり、なおかつ、その背後には〈文学を創造する人々の社会的価値を今一度、世間に対して再認識させる〉という、文筆業の存在意義を社会へ宣伝していこうとする文筆家たちの思惑が隠されていたのである⁵³。

そしてSDSは『ドイツ兵士の本』刊行から2年後、再び戦争を口実としつつ〈文筆業を社会へアピールする〉という思惑をもって、新たな書物を刊行することとなる。

6. 『SDSの戦争ファイル』—— 文筆業による戦争プロパガンダ活動の失速と挫折 ——

1916年初頭、ベルリンの出版社「ドイツ急使」(Deutscher Kurier)からSDS編集による小冊子『SDSの戦争ファイル』(„Kriegsmappe des SDS“)が出版された。この刊行物は『ドイツ兵士の本』に続き、SDSが第一次世界大戦の勃発によって敢行した〈戦争を口実として、社会へ向けて文筆業の意義をアピールする〉というコンセプトのもとで編纂された。『ドイツ兵士の本』では過去のドイツの偉人、文豪による作品が掲載されたが、『SDSの戦争ファイル』では執筆業者全てが当時活動した存命の文筆家たちであった。その冒頭には次のような言葉が掲げられている：

この度、ドイツ文筆家保護連盟によって刊行された『戦争ファイル』には、詩人、文筆家、造形芸

⁵¹ Fischer, Ernst: Schutzverband deutscher Schriftsteller. S. 160.

⁵² Im „Der Schriftsteller“ 1917.

⁵³ Fischer, Ernst: Schutzverband deutscher Schriftsteller. S. 162.

術家、音楽家など総勢 100 名以上の人々の発言が盛り込まれている。これらの人々の言葉は、それぞれ独自のものであり多様である。この多様な発言集は、世界の存続へと向けられた新しい視点を切り開こうとする歴史的な大事件（第一次世界大戦）との対決から生まれたドイツ精神を映し出す鏡である。『戦争ファイル』には、知的指導者たちによる弓のようにびんと張った研ぎ澄まされた感情が散りばめられ、読む者の心を絶えず突き動かすことだろう。この本の挿絵によって、発言集の「呪文」(Beschwörungsformel)の一つ一つに宿る力は倍増する。ドイツ文筆業界で最も著名な男性文筆家、女性文筆家を会員に取り込んでいるドイツ文筆家保護連盟は、第一次世界大戦の勃発以来、突如として知的労働者に襲いかかった苦境を打破すべく、また文筆業を代表する組織として戦争を全面的に支援すべく、その責務に適したあらゆる力を総動員してきた。『戦争ファイル』によってもたらされた大きな成果は、祖国の活動のために利用されるべきである。

『戦争ファイル』の出版にあたり、ドイツ文筆家保護連盟は約 1000 マルクの資金を拠出した。店頭価格は 4 マルクである。我がドイツ文筆家保護連盟は、愛書家諸氏が知的労働者の苦境に救いの手を差し延べてくれることを期待し、また、この『戦争ファイル』の出版に協力し、支援金を出してくれた芸術家や利己的な考えに固執することなく支えてくれた出版人諸氏に対して、この場を借りて心から感謝の意を述べたい。⁵⁴ [強調部分は訳者による]

『SDS の戦争ファイル』には、普通版、豪華装丁版の二種類があり、普通版は縦 27×横 23 センチで手漉き紙、豪華版は縦 40×横 33 センチで羊皮紙が使用された。収録された発言は 80 ページに及び、全て手書き直筆原稿の複製であり、全ページ数は 80 ページに達した。挿絵は、マックス・ベックマン (Max Beckmann: 1884-1950)⁵⁵、マックス・リーバーマン (Max Liebermann: 1847-1935)⁵⁶、エルンスト・バルラハ (Ernst Barlach: 1870-1938)⁵⁷、エミール・オルリック (Emil Orlik: 1870-1932)⁵⁸、ケーテ・コルヴィッツ (Käthe Kollwitz: 1867-1945)⁵⁹ など、この時代の第一線で活躍する芸術家によって描かれた。

⁵⁴ Kriegsmappe des SDS, herausgegeben vom Schutzverband deutscher Schriftsteller e. V., Berlin, Verlag Deutscher Kurier, o. J. (1916), S. 2.

⁵⁵ 画家、版画家、文筆家。ライプチヒの商人の家に生まれ、1900～3 年までワイマールの美術学校に通い、1903～04 年の半年間、パリに滞在。1904 年にベルリンに移住し、旺盛な芸術活動を展開する。第一次世界大戦には衛生兵として従軍。帰還後からヴァイマル共和国期にかけて、時代を代表する芸術家として活躍した。ナチス政権掌握後の 1937 年、オランダのアムステルダムへ亡命した。

⁵⁶ 画家、版画家。ベルリンの裕福なユダヤ人の家庭に生まれ、1866 年までベルリン大学で哲学を学んだ後、ワイマールの美術学校に通う。以後、芸術家としてヨーロッパ各地を転々とし、旺盛な芸術活動を展開した。1920 年にはプロイセン芸術アカデミー会長に就任し、1932 年には名誉会長となったが、ナチス権力掌握後は、プロイセン芸術アカデミー名誉会長の座を辞任し、反対姿勢をとった。

⁵⁷ 彫刻家、版画家、劇作家。田舎医者の子息として生まれ、1891～95 年までドレスデンの美術学校に通った。その後、彫刻家、版画家として創作活動に専念したが、1907 年からベルリンで文筆業を開始。表現主義に傾倒し、1924 年に戯曲『ノアの洪水』(„Die Sündflut“) でクライスト賞を受賞。現実生活に神的なものを探求する人間ドラマを描いた。

⁵⁸ プラハ生まれの画家、イラストレーター、工芸家。1896～97 年までミュンヘンの雑誌『青年』(„Jugend“) の編集者として挿絵を提供。その後、1904 年までプラハで芸術活動を展開、1905 年からベルリンの美術学校で教壇に立つ。1911 年からアフリカ、インド、日本など世界各地を周遊し、特に日本の絵画に影響を受けた。

⁵⁹ 女性版画家、彫刻家。無宗教、社会民主主義者である両親をもち、1890 年までミュンヘンの芸術学校に

KRIEGSMAPPE DES SDS



VERLAG DEUTSCHER KURIER, G.M.B.H.,
BERLIN SW 48



【図版5】巻頭を飾った挿絵⁶⁰

【図版4】『SDSの戦争ファイル』表紙

『SDSの戦争ファイル』の最大の魅力は、当時の文筆業界で活躍する詩人、小説家たちによる直筆原稿という形式であった。とりわけ、現代まで名前の残っている著名な文筆家を挙げると、ペーター・アルテンベルク (Peter Altenberg: 1859-1919)⁶¹、フェルディナンド・アヴェナリウス (Ferdinand Avenarius: 1856-1923)⁶²、ユリウス・バーブ、リヒャルト・デーメル (Richard Dehmel: 1863-1920)⁶³、ルードヴィヒ・フルダ (Ludwig Fulda: 1862-1939)⁶⁴、マクシミリ

通う。自然主義に影響を受けた絵画を発表。第一次世界大戦で従軍した息子を失い、以後、平和主義者として政治活動に積極的に関与していく。ヴァイマル共和国期には共産主義運動に関与し、それに基づいた芸術運動を展開した。

⁶⁰ この挿絵に描かれたマルス(Mars)は、ローマ神話の農耕と戦いの神。軍神としてグラディウス(Gradivus: 進軍する者の意)という異称でも呼ばれる。

⁶¹ オーストリア出身の文筆家。ウィーンで法律学、医学を学んだが、健康上の理由により断念。その後、短い期間、書籍販売業を営んだが、ボヘミアン生活に身を委ね、やがてフリーの文筆家としてウィーン、ミュンヘンを拠点に活動する。風刺文芸雑誌『ジンプリチシムス』(„Simplicissimus“)、文芸雑誌『青年』(„Jugend“)の寄稿者としても有名。

⁶² 書籍販売業者を営む家庭に生まれ、ライプチヒで自然科学、チューリヒで哲学、文学、美術史を学んだ後、約二年間イタリアに滞在。その後、1882年からフリーの文筆家としてドレスデンで活動。1887年には1923年まで刊行された雑誌『芸術監視人』(„Der Kunstwart“)を創刊した。

⁶³ 抒情詩人、劇作家。1891年に処女詩集『救済』(„Erlösungen“)を発表し抒情詩人として活動を開始。ニーチェ、リーリエンクローンの影響を受けた。神秘主義的傾向を持った抒情詩『しかし愛は』(„Aber die Liebe“: 1893)、『生命の葉』(„Lebensblätter“: 1895)、『女と世界』(„Weib und Welt“: 1896)などを発表した。

⁶⁴ 1862-1939 劇作家。1880年からハイデルベルク、ベルリン、ライプチヒの大学でドイツ学と哲学を学んだ。1883年にハイデルベルクで博士号取得。翌年からミュンヘンに定住し現地の文筆家と交流をもった。1896年からベルリンへ移り、「自由劇場」の副代表を務め、以後ベルリンの演劇界・文芸界で精力的に活動した。劇作品の他にもエッセイ、詩を書き、1923～28年には「ドイツ・ペンセンター」(Der deutsche Pen-Zentrum)の代表、さらには26年に「プロイセン芸術協会」副代表を務めた。

アン・ハルデン (Maximilian Harden: 1861-1927)⁶⁵、ゲルハルト・ハウプトマン (Gerhart Hauptmann: 1862-1946)、ヘルマン・ヘッセ (Hermann Hesse: 1877-1962)、アルノー・ホルツ (Arno Holz: 1863-1929)⁶⁶、アルフレート・ケル (Alfred Kerr: 1867-1948)⁶⁷、エルンスト・リサウアー (Ernst Lissauer: 1882-1937)⁶⁸、トーマス・マン (Thomas Mann: 1875-1955)、エーリッヒ・ミュザーサム (Erich Mühsam: 1887-1934)⁶⁹、ルネ・シッケレ (René Schickele: 1883-1940)⁷⁰、アルトゥール・シュニッツラー (Arthur Schnitzler: 1862-1931) であった。『SDSの戦争ファイル』は、このような当時の文筆業界で著名な人物たちによる詩、短編、論説などの表現形式をとった発言を集めたものであった。

さらに文筆業と並んで、ヘルマン・コーエン (Hermann Cohen: 1842-1918)⁷¹、エルンスト・ヘックル (Ernst Haeckel: 1843-1919)⁷²、ヴィルヘルム・ヴウント (Wilhelm Wundt: 1832-1920)⁷³ といった哲学者、科学者、ベルンハルト・デルンベルク (Bernhard Dernberg: 1865-1937)⁷⁴、ヴォルフガング・ハイネ、ゴットフリート・トラウプといった政治家、音楽家のフェーリックス・フォン・ヴァインガルトナー (Felix von Weingartner: 1863-1942)⁷⁵、同様に音楽家で連盟執

⁶⁵ ジャーナリスト。ユダヤ系絹物商人の息子として生まれ、13歳の時から商人見習を強制的に学ばされるが途中で断念。その後、旅回り一座の一員として十年間、ドイツを周遊する。1888年からジャーナリストとして、『ベルリン日報』(„Berliner Tageblatt“)、『ドイツ月曜新聞』(„Deutsches Montagsblatt“)、『さらに匿名で雑誌『現代』(„Gegenwart“)に記事を掲載する。1889年には、マックス・ラインハルトと共にベルリンで「自由劇場協会」(Verein „Freie Bühne“)を設立。さらに、1892年には政治週刊紙『未来』(„Zukunft“)を創刊。世紀転換期から第一次世界大戦にかけてのドイツ・ジャーナリズムを牽引した一人であった。

⁶⁶ 抒情詩人、劇作家、文学史家。1881年からベルリンの地方新聞でジャーナリストとして活動し、1883年に処女詩集を発表。1886年には『時代の書、現代人の歌』(„Das Buch der Zeit, Lieder eines Modernen“)、『1899年に評論『抒情詩の革命』(„Revolution der Lyrik“)などを発表し、型にはまった抒情的高揚を斥け、詩の発展にラディカルな転回を与えた。

⁶⁷ 劇場批評家、エッセイスト、文筆家。ユダヤ系家庭に生まれ、ブレスラウで哲学、歴史、文学を学び、博士号取得後、ベルリンで文筆活動を開始。『新展望』(„Neue Rundschau“)、『ブレスラウ新聞』(„Breslauer Zeitung“)の文芸欄を担当した。さらに1917年には自作の詩、戯曲を出版。1919～33年まで『ベルリン日報』(„Berliner Tageblatt“)、『フランクフルト新聞』(„Frankfurter Zeitung“)で劇場批評家として活躍。政治批判的な雑文書きとして一世を風靡した。

⁶⁸ 抒情詩人。ベルリンのユダヤ系家庭に生まれ、1907年からベルリンで抒情詩人、劇作家、エッセイストとして活動を開始。第一次世界大戦中に戦争プロパガンダ『英国への憎しみへの歌』(„Haßgesang gegen England“)を発表している。

⁶⁹ 抒情詩人、劇作家、エッセイスト。アナーキズム運動の指導者であり、反軍国主義運動の中心的役割を担った。

⁷⁰ 小説家、ジャーナリスト。1902年からエルザス地方の作家グループ「若きエルザス」(Das jüngste Elsaß)による隔週文学雑誌『疾風』(„Stürmer“)の編集に携わる。第一次世界大戦中はスイスに亡命し、1914年からスイスで平和主義者、反戦主義者による『白雑誌』(„Die weißen Blätter“)の編集者を務めた。

⁷¹ 新カント主義哲学者。ユダヤ人問題にも関わり、当時のシオニスト運動を推進した。

⁷² 動物学者。弁護士の息子として生まれ、1858年までベルリンで医学を学ぶ。さらにイェーナ大学で細胞学を学び、その後、1862年からイェーナ大学の臨時教授、ベルリン動物学博物館理事に就任。

⁷³ 物理学者、哲学者、医師。1851～56年までテュービンゲン、ハイデルベルクで医学を学ぶ。1857年医学博士号取得。さらに物理学、哲学を学び、1874年にはチューリッヒ大学教授に就任。医学、物理学、哲学の幅広い研究分野で活躍した。

⁷⁴ 政治家。1889年からベルリンで銀行員として働き、1901年にはベルリンの銀行取締役会理事に就任。1913年に「ドイツ民主党」(Deutsche Demokratische Partei: 略称 DDP)に入党。

⁷⁵ 指揮者、作曲家。オーストリアの外交官の家庭に生まれ、1881～83年までライプチヒで音楽を学び、1884年にはケーニクスベルクの楽団指揮者に就任。その後、ミュンヘン、ウィーンなど多くの音楽楽団、オペラハウスの指揮者を務めた。

行部であったヘルマン・キーンツルの弟ヴィルヘルム・キーンツル(Wilhelm Kienzl: 1857-1941)⁷⁶、そして経済学者ヤーコブ・リーサー (Jacob Riesser: 1853-1932)⁷⁷も『SDSの戦争ファイル』の寄稿者であった。

『SDSの戦争ファイル』の内容を前回の『ドイツ兵士の本』と比べると、文筆家と兵士の共闘といったモチーフは影を潜め、代わりに第一次世界大戦に対する各寄稿者の「個人的な態度表明」が詩、論説、短編といった様々な形式で著わされている。戦争賛美を謳い上げた『ドイツ兵士の本』とは違い、戦争をモチーフとした作品の内容も多岐にわたり、特に叙情詩、論説においては、故郷の婚約者へ向けられた兵士、あるいは兵士の帰還を待つ母親の心情が詠われている。ルネ・シッケレは『婚約者』 („Die Braut“) という詩の中で次のような詩節を書き残している：

夏はいずこへ？ 今、凍てつく寒さの中で私の片足は凍って動かない。私はこれまで何度も故郷で私の帰りを待つ女性に手紙をしたためたが、いつ頃からか返事は滞り、彼女と私はますます疎遠となつてしまった。私は、この寒さの中で、動かなくなった片足を引きずりながら、ひたすら故郷のことを思い続けている。⁷⁸

さらに、ルードヴィヒ・フルダは、故郷で息子の帰還を待つ母親の心情を論説で次のように表現している：

ある母親は、戦地に赴いている息子からの手紙を一日中待ち続けている。しかし、息子からの手紙はいっこうに届かない。彼女が息子の手紙を待ち続けて、かれこれ二年の月日が過ぎ去ろうとしている。息子はまだ生きているのか、それともすでに戦死してしまったのか、それすらもわからずに、彼女は毎日、手紙をしたため、息子からの返事を待ち続けるしかないのだ！⁷⁹

『ドイツ兵士の本』においては一貫したテーマであった戦争プロパガンダ的要素は、『SDSの戦争ファイル』においては巻頭を飾った挿絵や収録された作品の一部にしか見られない。一例を挙げると、作曲家でウィーンの宮廷オペラ支配人であったフェーリックス・フォン・ヴァインガルトナーによって書かれた論説は、この戦争プロパガンダの特徴を顕著に示している：

神がその始まりを定めたであろう恐るべき戦争は、世界史において原始的な激しい力をもった二つの事態を引き起こした：一つは、未曾有の力をもって自衛する我々、あるいは我々の同胞たちへ向けら

⁷⁶ オーストリア出身の作詞・作曲家。ウィーン、ブラハ、ライプチヒでピアノ、音楽学、文学を学ぶ。1883～84年までオランダのアムステルダムでオペラの指揮者を務め、1889年からはハンブルク、ミュンヘンでも指揮者として活動。さらに、音楽に関する論文も多く書いた。

⁷⁷ 法律学者、銀行業者。ハイデルベルク、ライプチヒ、ゲッティンゲンで法学を学び、1875年博士号取得。1880年から弁護士としてフランクフルトに移住。その後、政府の枢密法律顧問官、ベルリン大学客員教授に就任。さらに1900年から「ドイツ銀行家中央連盟」(Centralverband des deutschen Bank- und Bankiergewerbes)会長に就任。当時のドイツ経済界で大きな影響を与えた一人であった。

⁷⁸ Kriegsmappe des SDS. S. 40.

⁷⁹ Ebd.: S. 7.

れた最高級の名誉である。これは、民族の統一と浄化をもたらすことだろう。もう一つは、我々を不意に襲った引ったくりの群れどもへ向けられた蔑みである。⁸⁰

ヴァインガルトナーが述べている「不意打ち」、「自衛のための戦争」、「戦争による民族の統一と浄化」、これらは、ドイツが第一次世界大戦参戦の理由に掲げた最も重要なスローガンであった⁸¹。あるいはマックス・ベルンシュタイン (Max Bernstein: 1854-1925)⁸²は、次のような論説によって第一次世界大戦が「理念のための戦争」であることを強調している：

我々が残忍なものに対して恐怖を感じるかどうか、ということは、我々に自らの内面を見つめなおす契機を与えてくれることだろう。これは我々ドイツ民族にとって計り知れない幸福なのだ。ドイツ民族は、これまで自らの内面を凝視してきた。つまり、民族の理念を構築してきたのだ。したがって、我々はこの戦争に対して冷静に確固とした理念をもって戦うことができるのである。⁸³

こうした例からも明らかなように、確かに『SDS の戦争ファイル』は「戦争プロパガンダ」としての側面を備えてはいた。しかし全体としては、さまざまな寄稿者の戦争に対する個人的な見解を集成したものであった。『ドイツ兵士の本』で示された戦争支援や戦争賛美というテーマによる統一性は、『SDS の戦争ファイル』にはもはや見られなかったのである。

『SDS の戦争ファイル』の編集が本格的に行われた時期は、1915年3月から8月にかけてであった。収録された作品の末尾に各執筆者自らが記入した日付を見ると、作品が執筆された時期は1915年6～7月に集中している。この時期には、西部戦線においてこれまで主流であった「野戦」(Bewegungskrieg)が「陣地戦」(Stellungskrieg)へと移行し、戦況が泥沼化しつつあった。そして、第一次世界大戦において最大の激戦地となったヴェルダン、ソンムの戦いがすでに間近に迫っていた。

こうした状況を背景とすると、大戦勃発時のドイツ国民の高揚感は、『SDS の戦争ファイル』が出版された1916年初頭には、すでに醒め始めていたと思われる。したがって、「戦争プロパガンダ」としての性格を前面に押し出すことは、もはや時代の風潮にそぐわないものとなっていたのである。先に挙げた婚約者へ向けた兵士の心情、兵士である息子の帰還を待ち続ける母親の心情を詠った詩、論説の他にも、『SDS の戦争ファイル』に収録された作品の中には、第一次世界大戦に対して懐疑的な考えを示す、あるいは戦争責任を問うものがいくつも含まれていた。例えば、第一次世界大戦後、『子供の死』(„Kindertod“)のような戦争の悲惨さを描いた彫刻作品を残したエルンスト・バルラハや、第一次世界大戦に従軍した息子を失い、それ以降、平和運動に尽力したケーテ・コルヴィッツといった芸術家は、戦争の悲惨さを描いた挿絵を寄せている。

⁸⁰ Kriegsmappe des SDS. S. 26.

⁸¹ Fischer, Ernst: Schutzverband deutscher Schriftsteller. S. 164.

⁸² 法学者、劇場批評家、劇作家。ライプチヒ、ベルリン、ミュンヘンで医学、法学を学んだ後、ミュンヘンで弁護士として活動。さらに劇場批評家としてミュンヘンの雑誌に記事を書き、自らも劇作品を書いた。

⁸³ Kriegsmappe des SDS. S. 46.



【図版6】エルンスト・バルラハによる挿絵



【図版7】ケーテ・コルヴィッツによる挿絵

あるいはまた、詩人、小説家の中では、例えばそのセンセーショナルな作風からヴィルヘルム朝とはあまり良好な関係を築くことなく、政府当局の検閲に対して激しい抵抗運動を展開したフランク・ヴェーデキント (Frank Wedekind: 1864-1918)⁸⁴が、『SDSの戦争ファイル』に収録されたその論説の中で、ドイツの戦争プロパガンダに対して懐疑的な態度を示している：

世界を震撼させる戦争へと突き進んだ原始的な力は、民族が戦争を熱望したことから生まれたのである。このような民族性や民族の熱狂が、政治的権力へと転換されたのである。このことは、もはや無視することのできない重大な問題なのだ。⁸⁵

ヴェーデキントほど明確ではないにせよ、他の寄稿者の中にも、戦争に対する懐疑を巧みなあるいは曖昧な表現によって示した人物が何人かいた。例えばアルフレート・ケルは、簡潔な「妄想は長く続く」(Der Wahn ist lang) という一文を載せている⁸⁶。

⁸⁴ 劇作家。高校卒業後、宣伝業、文筆業に従事し、ゲルハルト・ハウプトマンら若い文学サークルとも交流し、サーカスの巡業に加わってヨーロッパ各地を周遊し大衆芸能の世界にも通じた。世紀転換期頃から『ルル』(„Lulu“)二部作に着手し、第一部『地霊』(„Der Erdgeist“)は95年に刊行されたが、第二部『パンドラの箱』(„Die Büchse der Pandora“)は検閲のため刊行が遅れ、上演も最初は非公開で行われた。1896年にはミュンヘンの風刺雑誌『ジンプリチシムス』(„Simplizissimus“)の共同編集者となり、98年にはライプチヒのイプセン劇場と俳優兼演出家として契約した。俗物市民的な傾向を嫌悪し、特に新しい性のモラルの提唱において先鋭な変革姿勢を持っていた。

⁸⁵ Kriegsmappe des SDS. S. 23.

⁸⁶ Ebd.: S. 17.

このように見ていくと、各寄稿者によって戦争に対する考え方はさまざまであったことがわかる。しかし、『ドイツ兵士の本』において見られた〈文筆業の意義を社会へ向けてアピールする〉という思惑は、『SDSの戦争ファイル』でも確実に継承されていた。ただし今回は、戦争を口実にしつつも、戦争プロパガンダ的要素を前面に押し出す代わりに、背後にあった「文筆業の意義の宣伝」という側面が強調された格好となっている。つまり、開戦前の社会において文筆家の孤立状況を作り出していた非現実的な考え方が再び姿を現し始めたのである。これは、これまで文筆業が抱えてきた問題であり、SDSが結成される引き金となった〈文筆業は「職業」(Beruf)か、あるいは「天職」(Berufung)か〉といった議論に直結するものであった⁸⁷。つまり、文筆業を「職業」として捉えることを基本理念として結成されたSDSであったが、戦争を口実とした文筆業のアピールのために、これまでSDSが掲げる綱領のアンチテーゼであった文筆業を「天職」として捉える考えさえも、SDS編集の刊行物に盛り込まれたのである。『SDSの戦争ファイル』冒頭部で示された「呪文」(Beschwörungsformel)という言葉が、まさにこうした状況を象徴している。例えば、政治家アドルフ・ヴェルムート(Adolf Wermuth: 1855-1927)⁸⁸は、理想化され、「神聖な」(sakral)領域へと高められた文筆家の役割⁸⁹が正当なものであると次のように主張している：

戦争が我々に対してこれまでに至る所で示してきた喫緊の使命の中で、最も高貴な使命、すなわち、精神面でドイツ国民を代表し、支援する存在であることがドイツ文筆家に与えられた。しかし、たとえ戦争が終結しても、無知蒙昧や誹謗中傷といった毒々しい棘に対して、ドイツ性に彩られた真実の聖火は、力強い炎となって永遠に輝くことだろう。この炎は輝きながらあらゆる世界の片隅へ入り込み、盲目な者たちに光を与えてくれることだろう。崇高な祭壇の上に立つ上級司祭と同様に、**時代の「指導者」、「預言者」である文筆家が苦境に立たされてはならないのだ。**⁹⁰ [強調部分は訳者による]

文筆家の「司祭」としての役割と並んで、ペンを武器に喩えた伝統的な役割を、劇作家フランツ・デュルベルク(Franz Dülberg: 1873-1934)⁹¹が述べている：

ペンを握った文筆家による戦争支援は、**文筆業が苦境に立たされている困難な時代においてさえも、**国家への援助、貢献にもつながるのだ。つまり我々文筆家は、国家の精神的・知的な砲兵なのだ!⁹²
[強調部分は訳者による]

⁸⁷ 真貝恒平：『ドイツ文筆家保護連盟の黎明 —— 1900年代におけるベルリンの文学風景 ——』北海道大学大学院文学研究科 研究論集 第四号 155～180頁 参照

⁸⁸ 政治家。警察署長の息子として生まれ、ライプチヒ、ハイデルベルク、ゲッティンゲンで法律を学び、1883年から判事として内務省で働く。1897年からロシア、オーストリア＝ハンガリー、ベルギー、スイス、イタリアとの国際貿易に関する条約の締結に大きな役割を果たした。1912年にはベルリンの市長に就任している。

⁸⁹ Fischer, Ernst: Schutzverband deutscher Schriftsteller. S. 165.

⁹⁰ Kriegsmappe des SDS. S. 6.

⁹¹ ジャーナリスト、劇作家、映画会社社員

⁹² Kriegsmappe des SDS. S. 68.

ヴェルムートとデュルベルクは、文筆業を特権化された職業であるべきだと主張した。そしてこの要求の背後には、両者の論説、あるいは『SDS の戦争ファイル』冒頭部にも見られた「文筆業の苦境を乗り越える」という表現からも分かるように、戦争によって今まで以上に経済的苦境に陥った文筆家を支援すべく、文筆業の意義を社会へ向けてアピールする、という目的があった。このような姿勢は、『SDS の戦争ファイル』が存命の文筆家たちによって著され、また愛書家向きの豪華版さえも刊行されたという経緯からも見てとれる。しかし、これらヴェルムートやデュルベルクに代表されるような一部の寄稿者が掲げた時代の「指導者」、「預言者」という文筆家の役割は、実際には社会に受け入れ難いものであった。

次節では、『ドイツ兵士の本』と『SDS の戦争ファイル』をもう一度比較し、SDS が第一次世界大戦勃発を契機として行った戦争プロパガンダ、そしてその背後にあった文筆業の存在意義の宣伝活動について総括する。

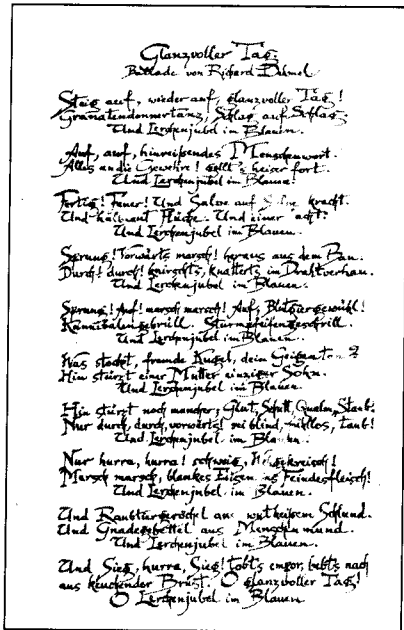
7. 結論

芸術家、知識人が、国民、および社会の中で自らの地位を上げることは、すでに 19 世紀の知識人が試みてきたことでもあった⁹³。この時代の波を受けて、当時、小説家、詩人、ジャーナリストを会員として取り込み、文筆業界における大組織へと変貌を遂げつつあった SDS は、戦争を通じて文筆業の意義を社会的にアピールするという戦略に乗り出したのである。したがって、『ドイツ兵士の本』、『SDS の戦争ファイル』の刊行は、SDS の社会政策的な活動として捉えることもできる。つまり、第一次世界大戦中に行われた SDS の活動は、1911 年に刊行された SDS の綱領を掲げた小冊子『商品としての文学』における「いかにしてペンで生活することができるか」といった問題を解決しようとした試みと比較すると、その時代状況、刊行に至った経緯やそのコンセプトという点では全く相反するものであった⁹⁴。しかし、「文筆家」と「社会」の溝を埋め、文筆家が陥っていた閉塞状況を打ち破り、「社会の中でいかにして文筆業を営むことができるか」といった問題を解決すべく刊行されたという点では、根底で通じるものであったのである。したがって、『ドイツ兵士の本』と『SDS の戦争ファイル』の 2 冊は、戦争という特殊な状況下で刊行されたために、戦争プロパガンダや戦争に対する意思表示という性質を備えることになったが、本質的には SDS の綱領に即した〈文筆家の社会への統合〉に向けた試みであったと言うことができる。

国民が戦時の高揚の只中であつた 1914 年末に刊行された『ドイツ兵士の本』には、積極的な戦争支援、戦争賛美という一貫したテーマがあつた。しかし、戦地の悲劇的現状、血生臭い陣地戦による犠牲者の増加といった戦争の悲惨さがますます知られるようになってくると、それまでの精神的高揚は根底から揺らぎ始める。そして、この時期に出版されたのが『SDS の戦争ファイル』であつた。

⁹³ Trommler, Frank: Sozialistische Literatur in Deutschland. Ein historischer Überblick. Stuttgart 1976, S. 15-24.

⁹⁴ 真貝恒平『文学の商業性 —— 1910 年頃における文学作品の価値をめぐって ——』独語独文学研究年報 第 31 号 99~114 頁参照



【図版 8】『SDS の戦争ファイル』に掲載されたデーメル直筆による詩

として政治的役割を担う人物へと昇華させるきっかけをつかんだかのように思われたのである。しかし、戦況が敗戦へと向かい始めると、彼らの一連の戦争賛美への試みは、軌道修正を余儀なくされた。そしてこれとともに〈文筆業の存在意義を社会へアピールする〉という試みもまた頓挫してしまっただけである。しかしながら、こうした〈文筆家の社会への統合〉をめざす SDS の試みは、第一次世界大戦終結後、さらにドイツ革命、ヴァイマル共和国へと引き継がれていくことになる。

戦争支援という主張の急速な減少は、SDS 会員の中にも多く見られた。例えば、『ドイツ兵士の本』、『SDS の戦争ファイル』に寄稿し、どちらにも煽動的な戦争賛美を含んだ作品を掲載したりヒヤルト・デーメルは、1914 年 51 歳で戦線行きを志願し、戦争の現実を目の当たりにすることによって、戦後には平和主義者への転向を果たしている。連盟代表ウルリッヒ・ラウシャーもまた当時、文筆家の中に多く存在した「回心者」の一人であった。

文筆家が「大戦のイデオロギー論者」(Weltkriegsideologen)、「戦争の意義を唱える者」(Sinnstifter des Kriegs)、あるいは「戦争スローガン生産者」(Stichwort- und Parolenlieferanten)、「ショービニズム的アジテーター」(chauvinistische Herzredner)として社会に示した戦争への姿勢は、彼らに一時的に政治的機能を与えた⁹⁵。つまり、これまでヴィルヘルム朝にほとんど無視されてきた社会の「アウトサイダー」としての現状を変革し、自らを知的指導者

(北海道大学大学院文学研究科博士後期課程)

⁹⁵ Vondung, Klaus: Das wilhelminische Bildungsbürgertum. Göttingen 1976. S. 153.